「砂上の楼閣に気づく」

2024年7月

聖書科　岡本 拓也

わたしのこれらの言葉を聞くだけで行わない者は皆、砂の上に家を建てた愚かな人に似ている。
雨が降り、川があふれ、風が吹いてその家に襲いかかると、倒れて、その倒れ方がひどかった。
（マタイによる福音書 7章 26～27節）

毎年される質問があります。

「数学の公式を覚える意味はなんですか。」「古典は勉強する必要がありますか。」

日常生活で使わない知識を学ぶ必要があるのか、という問いです。毎日山のような課題を前にして、余計な勉強はしたくないという気持ちでしょう。

私が思うにこの考えは、電子レンジを使うにあたって、温めたいものを入れてスイッチを押せば温まるのだからそれでいいじゃないか、と言うようなものだと思います。たしかに日常生活において冷凍食品を温める程度であれば、スイッチを押せば温まる、という認識で問題ないでしょう。しかし、これだけの知識では、スイッチを押せば「なんでも」温まる、という誤解が生まれます。それで、缶コーヒーをそのまま温めようとして火事を起こしたり、シャンプーした猫を乾かそうとして殺してしまうということが起こってしまいます（本当にこんな事件があったのです!）。

電子レンジは、マイクロ波を照射することで水分子を振動させ、その摩擦熱で対象物を温める装置です。マイクロ波は電磁波の一種ですから、導電性のある物質に当てると電気の火花が飛びます。また水分がある部分が温まりますから、濡れた毛が温まって乾くと同時に動物の内部が加熱されてしまいます。

物事の原理や成り立ちを知らなければ、それを正確に、うまく利用することができません。古文を学ばなければ故事成語の意味を誤解し間違った使い方をしてしまうでしょう。数学の公式をそのまま利用することはなくとも、それが導き出される過程を理解していれば、その考え方を応用して新たな別の問題を解決できるでしょう。

私たちの生活は、過去の歴史が生み出したさまざまな考え方、研究、発見、理論、失敗の上に成り立っています。公式を学ぶことも、古文を学ぶことも、この歴史の過程を学び今の私たちの生活がどのような基礎によって支えられているのかを学ぶことに他なりません。今では当たり前と思われている民主主義でさえ、その成り立ちを学ばなければ多数決との区別がつかなくなってしまうのです。その結果、今の日本では、本来は少数の意見を可能な限り反映させるための仕組みである民主主義が、少数意見を排除する仕組みとして機能してしまっています。

研究や学問の成果だけを学ぶことは、一見効率が良いことのように思われます。しかしそれは中身のない、応用の効かない、その場しのぎの学びであり、発展性がありません。与えられた人生を言われるがままに生きるのならそれで十分ですが、より豊かな人生を求めるのならば、知識を活かし、応用して、自分で人生を作り出さなければなりません。そのために大切なのは「なぜそうなのか」の部分なのです。これは建築で言うと基礎の部分であり、成果はその上の構造物に当たります。

構造物がどれほど見栄えの良い物であっても、基礎がきちんとしていなければ簡単に倒れてしまいます。これを「砂上の楼閣」と言い、聖書の言葉が由来と言われています。

私たちが中学、高校で学ぶのは人生の基礎の部分です。ですからそれは直接日常生活に役に立つようなものではありません。しかし、学んでおかなければ全てのことが表面的にしか理解できず、深みのない人生となってしまいます。

砂の上ではなく、しっかりとした基礎の上に人生を建てられるよう、一緒に学んでいきましょう。